六十を過ぎて、眠りが浅くなった。

隣のベッドで寝ている妻の寝言で目が覚めたりする。小さな声でムニャムニャという程度なのだが、目が覚める。自慢ではないが、私は寝不足に弱い。妻をたたき起こして注意しようとの誘惑をグッと我慢し、あーァと心の中でため息をつく。

朝刊配達のスーパーカブのエンジン音でも目を覚ますようになった。コンクリート製の段差スロープをガタゴトいわせて走り去ったときなどは、必ず目が覚める。金属製の郵便受けの蓋がかすかにコンッと鳴って、新聞が届けられたと分かる。四時半過ぎだ。

窓を開けて、「うるさいっ」と怒鳴ってやろうとは思わない。耳になじんだ生活雑音とでもいうのだろうか。いつも通りの一日が始まったのだ。

七時の起床時間までもうひと眠りできる。これは嬉しい。配達員の方には申し訳ないが、私はまた夢路へと辿るのであった。